

法然の三心深化論

丸 山 博 正

一 はじめに

法然の浄土教はみずから「我今浄土宗を立る意趣は、凡夫の往生を示さんが為也」といつているように、だれでもが平等に往生できる点にその根本が置かれている。そして信機信法にみられるように「自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に没し、常に流転して、出離の縁あることなし」という信機が「阿弥陀仏は四十八願をもって、衆生を摂受したまふ。疑なく、慮なく、かの願力に乗じて、定めて往生を得」という信法につながるのが法然の信仰構造である。

自身を「罪惡生死の凡夫」「出離の縁あることなし」と認識し、その自身のために阿弥陀仏の本願があると信じる。この場合に自己の往生が九品の階位の上位であるか下位であるかは問題になるであらうか。それより直接の問題は自己が往生できるか否かという点であらう。つまり凡夫往生の得否が法然浄土教の問題であって、より向上する往生は問題ではな

いと思われる。

一方、法然の消息には、

クラキタカク往生シテ、イソギカヘリキタリテ、人オモミチビカ
ムト、オボシメスベク候。

とか

極楽ノ上品上生ニマイリテサトリヲヒラキ、生死ニカヘリテ誹謗
不信ノ人オモムカヘムト、善根ヲ修シテオホシメスヘキ事ニテ候
也。

にみられるように「クラキタカク往生シテ」「上品上生ニマイリテ」という品位の増進を勧めるものがある。もっともこの二通の消息はともに念仏に対して誹謗不信の者と争うことを戒めており、そのような誹謗不信者と争うよりは上位の往生を考えるべきだとなっているので、これからすれば、争いを戒めるための方便と読めなくもない。しかし、方便としても品位の増進を勧めているのである。

法然浄土教の根本である凡夫の「往生得否」の問題とここ

に挙げた消息にみられる「より向上する往生」の問題について、筆者は先年一応の検討をしたのであるが、それは三心の浅深により九品の階位が定まるといふ法然の言葉をどのようにに解するかということに主眼を置いたものであった。そこで小論では法然の「往生得否」の問題と「より向上する往生」の問題がどのようにかわるのかということを含めて、あらためて法然における三心深化について考えてみたい。

二 法然における「往生の得否」

いうまでもなく凡夫往生の得否が法然の根本問題であり、日本仏教史上、法然出現の直接的意義はここにある。したがって主著である『選択集』も凡夫が往生できることを体系的に述べた書といえよう。逆にいえば『選択集』では「より向上する往生」はテーマではないのであり、ほとんど触れられていないのである。それでは具体的に『選択集』における凡夫往生の根拠とその価値づけをみていくことにする。

1 凡夫往生の根拠Ⅱ仏の本願に順じる

これは有名な三重の選択によって導き出されている。すなわち聖道を捨てて浄土門を選ぶということは、さとの仏教を捨てて、阿弥陀仏の浄土に往生する仏教に入ったことであり、その視点で仏教の行を見れば阿弥陀仏に直接帰依する行が正行となり、その他が雑行となる。さらに正行の中で本願

に順じる行である称名念仏が正定業として決定されるのである。

凡夫往生の根拠という点に限って『選択集』をみれば第一、二章で結論が出ていたのである。凡夫のために阿弥陀仏の本願があり、その本願には称名念仏すれば往生できることが示されている。したがって凡夫は称名念仏によって往生できるといっているのである。

2 正定之業Ⅱ仏の選定

正定之業は善導の『観經疏』散善義で称名念仏について述べられている一節中の語である。この正定之業の「定」は読み方によっては「三昧」の意味にとれる。事実永観や珍海はその意味にとっている。そうすれば、この語は行者が定Ⅱ念仏三昧に入る行となる。しかし、法然は行者の定ではなく阿弥陀仏の「定め」の意味にとっている。この定の解釈は『選択集』よりも『無量寿經釈』において直接になされている。称名念仏は彼仏本願行也。故修之者乗彼仏願必得往生。由願不虛故以念仏為正定之業也。其本願義至下応弁。但正定者法藏菩薩於三十二拾億諸仏誓願海中選定念仏往生之願。故云定也。

このように法然は衆生の往生の行である称名念仏は阿弥陀仏によって「選択」されたことを強調しているのである。

以上のように法然は凡夫が往生できる根拠を仏が選定され

た称名念仏に置き、その仏の本願に順じる故に（順彼仏願故）往生を得るとしたのである。これに費したのは『選択集』の一、二章である。ここで一応の凡夫往生の結論が出たのなら、その他の各章は何のために設けられたのであろうか。それは「選定」せられた称名念仏の価値を高めるためといえるであらう。

3 念仏の価値Ⅱ仏による勝と易

『選択集』第三章では四十八願が二百一拾億の諸仏国土から精選されたという価値づけを行い、さらに称名念仏については、名号は仏のあらゆる功德が含まれ万徳所帰であるという勝の意と、だれでもが修し易いという易の意味が述べられる。

そして、もし造像起塔を衆生往生の行と定めたならば富貴の者は往生できるが貧賤の者は往生できない。智慧高才と定めたならば智慧ある者は往生できるが愚癡の者は往生できない。多聞多見と定めたならば多聞の者は往生できるが少聞の者は往生できない。持戒持律と定めたならば持戒の者は往生できるが破戒の者は往生できない。現実の世の中を見ると貧賤の者・愚癡の者・少聞の者・破戒無戒の者が圧倒的に多いではないかと述べて

然、則弥陀如来法蔵比丘、昔、被^レ催^ニ平等慈悲、普為^レ撰^ニ於一切、不^レ下^ニ造像起塔等諸行、為^ニ中往生本願、唯以^ニ称名念仏一行、為^ニ其

本願^一也。

として平等に往生できる点を強調している。そして精選された称名念仏という価値と、その内容の勝であり易であり平等であるという価値はすべて仏の側のはからいによるのである。

4 八選択Ⅱ阿弥陀仏・釈迦・諸仏による

このように法然は本願念仏が精選された勝易の念仏であるとして絶対的な価値づけをしたのであるが、さらにこれを八選択に拡大して、本願念仏が阿弥陀仏のみならず釈迦や諸仏によっても選び取られていることを述べている。

第一の選択本願（第三章）は二百一拾億の中から選びぬかれた本願念仏の意で阿弥陀仏の選択である。第二の選択讃歎（第五章）は釈迦の選択で、諸行の功德は讃歎せず、念仏の功德のみを選んで讃歎している。第三の選択留教（第六章）も釈迦の選択で『無量寿経』のみが法滅の後にも世に留まるように釈迦を選んだというものである。第四の選択撰取（第七章）は阿弥陀仏の選択で、念仏の衆生を撰取すべく選んでいる。第五の選択化讃（第十章）は化仏が聞経を讃歎せず、念仏のみ讃歎するもので、阿弥陀仏の選択である。第六の選択付属（第十二章）は釈迦の選択で『観無量寿経』の定散諸行は廃され、念仏のみが選択されて付属される。第七の選択証誠（第十四章）は諸仏の選択で、諸仏は念仏のみを選んで

証誠するのである。第八の選択我名（第十六章）は阿弥陀仏による選択である。

そして、ここで注意すべきは、阿弥陀仏は当然のこととして、釈迦も諸仏も選択の理由を本願の故にとしていることである。例えば釈迦の選択付属（第十二章）では

定散諸行非本願、故不付属之、亦於其中、觀仏三昧雖殊勝行、非仏本願、故不付属、念仏三昧是仏本願、故以付属之、

として念仏付属の理由を「本願の故に」としているし、諸仏の選択証誠（第十四章）でも

念仏是弥陀本願也、故証誠之、余行不爾、故無之

として「本願の故に」念仏を証誠しているのである。

このように法然は往生の根拠である本願念仏の価値づけに第三・五・六・七・十・十二・十四・十六章を費している。

5 念仏の行じ方Ⅱ仏の本願による

念仏の行じ方は本願の文によれば「乃至十念」であるが、善導はこれを

使下信心求念（スルヲ） 上尽二形、下至十声一声等、以二仏願力、易レ得二往生二（ムツクベシ）

としており、法然もこれを受けて

善導總言ニ念仏往生願、者其意即周也。所以然者上取二形、下取二念、之故也

と『選択集』三章で述べて一生涯の念仏相続と定め、その最

低のケースが十声一声であるとしている。そして、この行の相続も本願で定められているのである。

6 念仏の信Ⅱ三心Ⅱ至心・信樂・欲生我国Ⅱ本願による

念仏の信は至誠心・深心・回向発願心の三心であり、これは『観無量寿經』で釈迦が定めたものである。法然はこの三心を

此經（観經）三心即開二本願、三心、爾故至心者至誠心也、信樂者深心也、欲生我国、者廻向發願心也

として本願の至心信樂欲生我国を開いたものとしている。つまり三心は本願によって定められているのである。

かくして法然の主著である『選択集』ではその主題は「往生の得否」であり、凡夫のために設けられた絶対的価値のある本願に順じる念仏の故に往生が得られ、その念仏の行じ方も信じ方も本願で定められており、阿弥陀仏はもとより釈迦も諸仏も本願の故に念仏を選択しているのである。しかも、このような本願の選定や価値はすべて阿弥陀仏をはじめとする仏側で定まっていることがわかるのである。

三 法然における「より向上する往生」

本願（仏側）によって衆生の信も行も定められているというのが法然の根本姿勢であり、凡夫はその本願に順じること

で往生できる。このような往生の得否の次元からは「より向上する往生」の問題は出てこない。それではどのような次元から「より向上する往生」が出てくるのであろうか。それは仏側で定められた信や行を衆生側がどのように身につけるかという次元で出てくるのである。三心についてこれを見れば大きく二点があると思われる。

1 念仏相続による行具の三心Ⅱ衆生側

『選択集』八における三心の説き方は三心の内容と、一心でも欠いたら往生できないというものである。この三心を衆生がどのように身につけるのかという点には触れていない。

この点に触れた法然の言葉をみると『四十八巻伝』二一の「つねに仰られける御詞」には

ふかく本願をたのみて一向に名号を唱べし。名号をとなふれば、三心をのづから具足するなり

とあり、「大胡太郎実秀へつかはす御返事」には

三心具足シテ往生スト申事ハ、マコトニソノ名目ハカリヲウチキクオリハ、イカナルコ、ロヲ申ヤラムト、コトコトシクオホエ候ヌベケレドモ、善導ノ御コ、ロニテハ、コ、ロエヤスキ事ニテ候ナリ。モシナラヒサタセサラム無智ノ人、サトリナカラム女人ナトハ、エ具セヌホトノコ、ロエニテハ候ハヌナリ。マメヤカニ往生セムトオモヒテ念仏申サム人ハ、自然ニ具足シヌヘキコ、ロニテ候モノヲ

とあり、「十二問答」には

念仏ヲ申モノハ極楽ニウマルナレハトテ、往生ヲタニ申セハ、三心ハ具足スルナリ

とあるなど、念仏の相続による行具の三心を述べたものが多い。こうした場合に前提になるのは「ふかく本願をのたみて」「マメヤカニ往生セムトオモヒテ」「極極ニウマルナレハトテ」のような三心の基礎となる心構えである。この心構えが念仏相続と結びつくことによって三心具足するというのである。ここに法然の念仏相続による信仰の深化論がみられる。

2 念仏相続による三心の深化Ⅱ衆生側

法然は『逆修説法』で

随_二三心_一、浅深_二可有_一九品_一、階位_二也。然者始_レ自_二上々品_一、終_レ至_二下々品_一、具足_二三心_一、必得_二往生_一、故云_二若少一心即不得生_一

と述べている。ここでの文勢は三心があれば必ず往生できるという点にあるが、その往生は三心の浅深によって品位が定まるというのである。

この『逆修説法』を踏まえて『選択集』をみると同様なことが第五章にみられるのである。第五章のテーマは選択讃歎であり念仏の一念に無上功德があることが説かれている。これはもち論、仏側による功德である。そして、その無上功德の一念と三輩九品の関係について述べているのであるが、そ

れは

若約^{シテ}念^ニ仏^ニ分別^ス三輩^ニ、此有^ニ二意^ニ、一隨^ニ觀念^ニ淺深^ニ而分^ニ別^ニ之^一、
二以^ニ念^ニ仏^ニ多少^ニ而分^ニ別^ニ之^一。

となつており、三輩が「觀念の淺深」と「念仏の多少」によつて分別されるというのである。この「觀念の淺深」は『往生要集』を引用したことからつかわれた表現で、この觀念は三心とみてよいものである。

三輩九品が三心の淺深と念仏の多少によるという発言は『選択集』では珍しい現象である。何故なら『選択集』では仏側で定められた念仏の価値が常に述べられており、その価値を受ける衆生側の淺深や向上の点には触れることが少ないからである。

以上のように法然には念仏の相続による行具の三心と、三心の淺深と念仏の多少によつて品位が定まるといふ二点の発言がある。

この二点を三心の深化という視点でみれば同一線上に結ばれるのではないだろうか。先ず前提となるのが「まめやかに往生せんと思ひて」などの「思ひ」である。この「思ひ」が念仏相続によつて三心となるのは「思ひ」が念仏することにより「本願に触れる」からである。ここに「思ひ」が「本願に触れる」ことにより、念仏者の信が深化するという論理がある。「思ひ」が三心具足となり、その三心が念仏相続によつ

て、さらに深まっていふという三心の深化があるといえよう。つまり行具の三心の論理を延長すれば、その同一線上に三心の深化があり、品位が増進することになるのである。

四 往生の得否と三心の深化

往生の得否は『選択集』に代表されるように、無上の価値ある本願念仏に順じることによつて、凡夫が往生できることを説くものである。次の向上深化は得否を踏まえた上に立つて、念仏の相続により三心具足し、三心が深化し品位が増進するといふものである。

法然の言説の中では、当然第一の往生得否の次元での発言が多い。聖道門から淨土門を独立させ、凡夫往生を主張するからには、凡夫が往生できるか否かという得否の次元で論じるべきだからである。

往生の得否で論じる場合、無上の価値ある本願に順じてこそ凡夫が往生できるのであり、そこに本願中心の廃立がなされるのも、これまた当然のこととなる。念仏は本願であるから立てられ諸行は非本願のゆゑに廃される。信機信法からいへば人間はすべて「罪惡生死の凡夫」であり九品の有無は問題でなくなる。

極樂ノ九品ハ弥陀ノ本願ニアラス、四十八願ノ中ニナシ。コレハ
釈尊ノ巧言ナリ。善人惡人一処ニムルトイハハ、惡業ノモノト

モ慢心ヲオコスヘキカユヘニ、品位差別ヲアラセテ、善人ハ上品
ニスミ、惡人ハ下品ニクタルナリト、トキタマフナリ。イソキ
マカリテシルヘシ⁽¹⁾

というのも、罪惡生死の凡夫が往生できることが肝要で、九
品は本願にはないというのである。

ところがこのような本願中心の廢立の姿勢は、衆生側の信
仰の程度により對機說法によって変化する場合がある。念仏
と諸行については「我ココロ弥陀ノ本願ニ乗シ、決定往生ノ
信ヲトルウエニハ、他ノ善根ニ結縁シ助成セムコト、マタク
雜行トナルヘカラス、ワカ往生ノ助業トナルヘキ也⁽²⁾」と禪勝
房に言っている。決定往生の信をとった者には雜行が念仏の
助業として復活してくるのである。また善惡については「ほ
とけは惡人をすて給はねども、このみて惡をつくる事、これ
仏の弟子にはあらず。一切の仏法に惡を制せずといふことな
し。惡を制するにかならずしもこれをとめえざる者は、念
仏してその罪を滅せよとすすめたる也。わか身のたへねはと
て、仏にとかをかけたてまつらん事はおほきなるあやまり
也⁽³⁾」といっている。善人も惡人も救うのは仏の側である。そ
れを衆生側にすりかえて「このみて惡をつくる」のは誤りな
のである。平等の慈悲を信じれば信じるほど、衆生は善を求
めるべきなのである。同様のことは九品についてもいえよ
う。仏は九品の差別なく三心具足の者を往生させるのであ

る。その平等を信じれば信じるほど、衆生は念仏を相續すべ
きなのである。そこに三心の深化の意義があるといえよう。

1 「大胡太郎実秀へつかはす御返事」〔西方指南抄〕、『昭法
全』五二六頁。

2 「鎌倉の二位の禪尼へ進ずる御返事」〔西方指南抄〕、『昭法
全』五三〇頁。

3 「法然の九品觀と熊谷直実の上品上生往生立願」〔三康文化
研究所年報〕第十九号、参照。

4 『無量寿経釈』〔昭法全〕八一頁。

5 『選択集』三（土川本三四頁）。

6 『往生礼讃』前序〔淨全〕四・三五六頁。

7 『觀無量寿経釈』〔昭法全〕一二六頁。

8 『西方指南抄』〔昭法全〕五一五頁。

9 「十二問答」〔昭法全〕六四〇頁。

10 『逆修說法』二七日〔昭法全〕二四一頁。

11 『選択集』五（土川本）四九頁。

12 「觀念の浅深」が三心の浅深であることについては3の拙論
で述べた。

13 「十二問答」〔昭法全〕六三三～四頁。

14 「十二問答」〔昭法全〕六三三頁。

15 「十二箇条の問答」〔昭法全〕六七九～六八〇頁。

△キーワード▽ 法然、行具の三心、三心の浅深
(大正大学助教授)